

令和6年度 第1回 東近江市市民協働推進委員会 会議録

◆開催日時 令和6年4月23日(火) 午後7時から午後9時まで

◆開催場所 東近江市役所 315 会議室

◆出席者

市民協働推進委員 深尾 昌峰、辻 薫、小島 秋彦、小嶋 一浩、
水谷 友彦、藤澤 加奈子、綾 康典、富田由美子、
藤澤 彰祐、藤 一道、小島 淳司、朝比奈 遥
奥田 新悟、若林 理恵、中井 昇

市民部長 高山、市民部次長 中江

まちづくり協働課 嶋村、西川、八木、竹内、内田(事務局)

◆議題

(1) 第二次市民協働推進計画について

(2) わがまち協働大賞について

【事務局から開会のあいさつ】

- ・司会進行は課長
- ・市民部長あいさつ

【委員長あいさつ】

<委員長>

委員も事務局も同じ立場で、みんなで意見を出し合い、作っていく会にしていきたい。
策定した計画を計画で終わらせないことが大切である。

まちのわ会議は、国内でも素敵な取組であると感じている。

協働が目的化するのではなく、手段としての協働を目指していきたい。

できることとできないことについて理解し、市民と行政とが健全にせめぎあいながら、行政にできないことで市民に何ができるかを考えていく必要がある。

【議題】

(1) 第二次市民協働推進計画について

<事務局>

社会情勢の大きな変化による市民のニーズの多様化・複雑化に対して、市民と行政がそれぞれの特性を生かして、地域課題の解決に取り組む必要がある。

協働によるまちづくりの推進を実効性のあるものにするため「市民協働推進委員会」を設

置した。協働によるまちづくりの調査・審議、市民協働の取組の検討、その他協働の推進に向けた活動を行うことを目的としている。

第二次市民協働推進計画では、市の財産を再発見・再発信するとともに継承していく必要がある。第一次計画の実行を経て、従来の活動に加え、新たな活動を支援し、誰もがまちづくりに関わり、つながり合う環境づくりを目指す。

計画書は読みやすさを意識して、中学生でもわかりやすく、身近に感じてもらう内容としている。

基本施策1 郷土愛と人づくり

協働を行っていききっかけとして、郷土愛の醸成を目指す。

まちづくりへの理解と人材の育成

→本年度で8年目、87名の地域担当職員が活動しているが、10年をめどに見直しが必要職員のモチベーション向上のためにもスキル向上と市民への認知度向上が課題

基本施策2 交流・活動の基盤づくり

行政と市民が互いに情報を共有し、テーマのある発信を心掛ける。

わくわくこらぼ村など、交流機会を創出し協働のきっかけを生み出す。

基本施策3 持続可能な地域自治の醸成

まちづくり協議会に活動に関して、イベント型からの脱却を目指し、地域活動支援型への移行を促進する。

基本施策4 協働の仕組みづくり

外国人の割合が増加している背景などから、地域共生社会を目指す。

まちのわ会議から、次の段階へ踏み出すことを目指す。

中学生議会など、若者の挑戦を応援できる仕組みづくりを促進する必要がある。

<委員長>

ポイントになり得る点や、論点出し、論点の気づきについて自由に発言を。

<委員>

今年から自治会長をしているが、若い人の加入率が低い現状をどうすればいいか。

町内掃除など、若い人が自治会に関わる未来が想像できない。

古い、新しいのどちらかに合わせるのではなく、上手に中間をとって仕組みづくりができないか。

<委員長>

若い世代の自治会参加率が低いことに対しての特効薬はないが、このままではいけないことはわかっている。

自治会を自治のベースとして、自治会がなくなったら誰が困るのか議論を行い、なくなってしまうたらもう元には戻らないこともわかっておかななくてはならない。

<委員>

自治会にかかわらず、役割を担う人手は不足している。

負担がかかることが嫌なので、何とかして負担を減らす発想が活動の主流となっている。

負担になっている部分を減らすことが課題の解決としての主流になっているが、それではしんどい。

今はないけれどもこれがあるといいという発想をいかし、ゼロからプラスにできる取組が必要なのではないか。

<委員>

中学生議会、まち協には、サポートがあるため、活動がやりやすいと感じているが、サポートがなくなったら果たして継続していけるのだろうか。

<委員長>

役員の免除などやらない方向への仕組みは多いが、やる方向への仕組みが少ないという風潮は今の時代にマッチしていない。

高齢化の現状の中で、実は興味を持っている若者は多い。

時代に合ったクリエイティブなやり方が必要になってくる。

<委員>

当事者の考えや望みが置き去りにになっている。

消防団に憧れる若者は多い。

中学生議会など、当事者の声を取り上げられる仕組みはいいと思う。

<委員>

情報の共有や、見える化が必要になってくるのではないか。

当事者の目線から、発達が遅い子どもに関して、現状として支援をたらいまわしされている感覚がある。

いろいろな部署を回るのではなく、一箇所で相談が済む専門的な相談窓口の必要性を感じる。

総合的に相談できるコンシェルジュの配置など、包括的な支援を望む。

<委員>

そろそろまち協の後継者問題に対峙する時期であることから、まち協の在り方を考える必要があるのではないか。

従来どおりのイベント型でいいのか、若い世代が望むものは違うのか。

<委員長>

破壊的継承という形もある。

20年前とは状況が違ってきているため、例えば全面的なサポートの上で試験的に一つのまち協を廃止してみるのもひとつの選択肢ではないか。

<委員>

学校とともにある地域づくりに関する計画は前向きに進めそう。

協働大賞を受賞した八日市南高校の地域振興の取り組みが広がればいい。

五個荘でのイベントでは、六心の教えスタンプラリーを中学生がシートやキャラクターとして作成してくれた。

学校とのつながりをいかして、将来まちづくりに興味を持ってもらえるような人材育成が必要では。

<委員>

様々な世代とコミュニケーションをとることで、地域の人々による活動が活発になることを実感している。

高齢者は危機感を持って具体的に集落の課題を感じているが、他の世代への課題の共有は進んでいない。

横のつながりが強いことはよいことだが、縦のつながりが弱いことが課題

<委員>

地域内でラジオ体操を行っているが、小学生がいない地域が出てきた。

今後実施できなくなることも考えられ、どうしていけばいいか解決策を探さなくてはならない。

<委員>

多数決や、長の一存で決定してしまう仕組みがまだまだ残っているが、その中では話し合いを重視する若い世代の声を取り入れづらい。今後更に溝が広まっていくのではないかと懸念がある。

<委員長>

技術で乗り越えられることもある。

合意形成に関する研修など、効果的ではないか。

第二次市民協働推進計画について、昨年度時点で検討段階の項目についてこれから考えていきたい。

【議題】

(2) わがまち協働大賞

<事務局>

わがまち協働大賞では、東近江市内で実施されている公益的な取組について、応募があった団体について優良な協働事例を表彰する。表彰や、HP掲載を通して活動を広く知ってもらうきっかけにすることが目的

去年は8団体が参加し、本年度も募集している。

本年度（第9回）に関しては、学校や企業での活動を掘り起こせないだろうか。

受賞による価値づけをどのようにしていくか。→参加のモチベーション

審査のプロセスについての見直し

<委員>

自治会役員にも審査員をお願いしてはどうか。

いろんな人がいて、多様な視点からの評価を受けられるのではないか。

<委員>

去年は審査される側として参加した。

長い準備期間と強い思いを持っての参加であったが、大賞受賞はならず。

高校生と大人では、同じ取組をしていても、高校生のほうが評価されやすいのではないか。

いろいろな観点からの活動でいいんだ、ということを伝えたい。

<委員>

若い人の周りのエネルギーがすごいことを実感する。

応募を部門で分けられるのではないか。

<委員>

大賞を取った団体のその後はどうなっているのか。

受賞して終わりではなくその後も追って広報すれば面白いのではないか。

<委員>

推進計画を採点基準にしてみるのはいかがでしょうか。

→今後についての検討のヒントになるのではないかと。

<事務局>

部門ごとの募集だと、主催側も探しやすい。

<委員>

1年目は応募が60件を超えていたが今は少ない。

だからといって活動している団体がいないわけではない。

前は落選であったが今はどうなっているのか。→掘り起こしの時期

<委員>

一年目の賞品は100万円相当と言って、地域の事業者などからクーポンや商品券を提供してもらった。地域内コミュニケーションのきっかけにもなり、賞品提供側も活動者側に興味を持つことができる。

<委員>

びわこジャズフェスティバルののぼり旗のように、目に見える形としてプロモーションを行うといいのではないかと。

認知とプロモーションを両輪で回していかななくては縮小するばかりでは。

<事務局>

部門を設けるのはいいと思う。

巻き込みたいところを見越したジャンルや賞を設定する。

企業が熱心に活動していても、まちづくり協議会や活動団体とのつながりはできていない。

→企業と協力することで活動を継続して続けていくことができるかもしれない。

<委員長>

第10回を見越し、中長期的な計画を立てていくことが重要になってくる。

見えていない活動を掘り起こしていくために各部門を設定する。

今までの関係団体ケアについても進めていけるのではないかと。

<事務局>

7月1日から募集予定

要綱は出来上がっている状態なので、方向性は次回までに決めておきたい。

<委員>

高校生ヒアリングに同行できないか。

八日市南高校は金曜日夕方に活動している。

八日市南高校に限らず、10代20代前後の若い世代によるヒアリングや評価が効果的ではないか。

<委員>

100万円相当の賞品はどうやって集めたのか。

合同説明会のようなオンラインでのヒアリングの実施を検討してみてはどうか。

<委員長>

せっかく開催するならばこだわりをもってやっていきたい。

今回は出来上がった要綱を確認した上で、議論を進めていきたい。

<事務局>次回は令和6年6月19日午後7時から開催

午後9時 閉会